

## 提案の題「有明湾に浮かぶ防災基地」

### (趣旨)

かつて環日本海経済交流圏構想が喧伝された。構想の打ち上げをテコにして中国やロシアの沿岸未開発都市の開発を企図したが、具体的な連携発展イメージが描き切れなかったために経済の衰退と共に消滅した。同じ着想から環東シナ海経済交流圏構想も検討されはじめたが企画段階で消えた。

窺える資料から点検すると、中国の安い労働力をテコに韓国、日本の資本と技術力を駆使するという構造の基本が共通している。国内の対応も中国地方から中部地方、東北地方、北海道までの主な沿海都市が手を挙げ舞台の上で踊ろうとしたが、自らそれに相応しい都市構造への転換を図ろうとするまでに至らず頓挫するのやむなきに至った。

あれから二十年余経、もはや基本とした構造が成り立たないばかりか、経済面に特化される交流では議論にもならないばかりの推移が見られる。その上、交流の多極化と各国の個性ある隆盛により環東シナ海圏域にマンモスのような巨大化現象が見られる。他方で国内的にも九州新幹線が九州東部を縦断する形で開通した。連携の密により少なくとも九州東部をひとくくりにして発展を考えられる下地ができたと考えられる。

こうした背景をチャンスと捉えた上で、骨太でダイナミックな九州まるごとまちづくりにつなげていけないかと切に思う。

### (環東シナ海交流圏構想)

わたしが考える環東シナ海交流圏構想はビジネス、観光、文化を三本柱とし、三本柱を媒介にして金、人、物、情報の交流を盛んにすることが狙いである。

交流圏の主要都市として、九州では福岡、熊本、鹿児島、韓国は釜山、仁川、中国は大連、青島、上海、香港、台湾は・・・である。いずれも港湾、空港を有していることが将来への持続可能性ある発展への道を開く鍵になる。

これら主要都市改造、あるいは再改造のキーワードは「国際」である。よく使われてきた言葉であるが、本当の意味で国際交流拠点都市としてまちづくりが行なわれてきた事例があるようで実は国内にはない。つまり言葉だけが踊ってきた過去とこの際早急に決別し、九州で実体ある取り組みの先鞭をつけていくことができないかと思う。

国際交流拠点都市形成へのコンテンツは次の通りである。全部が無理な場合でも少なくとも三項目以上の整備がほしい。

緑のストックヤード確保にもつながる地震津波を防ぐ人工丘陵の造成、 田園散居型の農村団地、牧畜団地の整備、 日本の医療技術の高さを生かした人材育成と具体的治療に当たる高度医療機関の整備、 東京ディズニーシーのような海を学び楽しむ施設、 環東シナ海を廻るに足る九州ブランドの確立と地場産業の高度育成である。

関係者等それこそ燃える火の玉の如くなって構想を打ち立て、オーソライズし、できるところから整備を図り将来に備えることが肝要である。

(提案：有明湾に浮かぶ防災基地)

環東シナ海交流圏構想を詳細に述べることで自体本提案の趣旨ではないが、要は大きな大きな都市構想論の中でまちづくりを進める考え方も一方で是非持ち合わせてほしいという思いでわたしたちはいる。そうした意味で東シナ海交流圏構想では大九州東部都市圏整備という考え方の中でまちづくりを捉えられる。

そうした考え方を前提にしたとき、当然長期戦を覚悟しなければならないが、わたしたちには是非最初に取り組んでほしいプロジェクトがある。

東北大震災を教訓にしての危機管理対応という視点と、公害や埋め立てでとかく負のイメージが付きまとっている有明湾のイメージをぜひ明るいものに転換する視点から提案するものである。

プロジェクトの内容は九州東部有明湾に「浮かぶ防災基地」を整備することである。浮かぶ防災基地の湾奥への普段の係留はもちろん難しいであろうから、場所は熊本港先でよい。

浮かぶ防災基地は、大型タンカーのような、広くて平らな甲板を有する大型船を何艘か並べてくりつけたものとする。メガフロートがあるではないかと言われそうだが、自ら動けないばかりか、箱内に重量物が入ると沈みがちになり、揺れるほか、窓もなく暗い内部となるなど用いようとしていることに対し、素人でも不適切部分がすぐに思いつくほどであるので対象外とする。

基地の腹部、つまり各船内には水や食料、衣料、寝具、医療品などを豊富に備蓄し、宿泊可能なベッドがいくつも置けるスペースといくつもの折りたたみベッドが常備されているのである。したがっていざというときの大規模な避難所にもなりうるというわけである。

その上この避難所には甲板に広場があるので避難生活が仮に長期に渡っても健康的である。加えて医療設備も整えて置くので医者さえいればいつでも治療行為が可能である。

浮かぶ防災基地にはヘリコプターの発着が可能なほか、防災無線基地としての機能も併せもち、九州各都市向けのほか本州への受発信も可能なシステムと設備を有する。

自ら動ける浮かぶ防災基地としたのは、係留地付近以外に災害が発生したときには、各船を切り離した上で救助並びに避難者収容船として九州をはじめ国内、さらには環東シナ海交流圏の主要都市等に派遣が可能というメリットがあるからである。